第 41 回庭野平和賞 受賞記念講演

【仮訳】

「宗派を超えた戦時下の平和構築：希望と正義を見出すために」

モハメド・アブニマー

2024 年 5 月 14 日

アッサラーム・アライクム（皆さまに平安あれ）。皆さまに心よりご挨拶申し上げます。

ご来賓の皆さま、そして主催者の庭野平和財団理事長、庭野浩士博士。

このたびは庭野平和賞委員会より第 41 回庭野平和賞受賞の栄誉を賜り、またご臨席の皆さまのご承認をいただき、まことに光栄に存じますとともに、身の引き締まる思いでおります。謹んで 2024 年度の庭野平和賞受賞の栄誉をお受けいたします。

本日は栄えある賞をお受けし、私は宗教の違いを超えて共に平和構築に取り組んだ数千人にのぼる平和の創造者たちの功績に思いを馳せております。私たちは、スリランカ、ミンダナオ、パレスチナ、ナイジェリア、アラブ地域、ヨーロッパ、アメリカをはじめ、世界各地で活動を共にしてきました。この賞は、そうしたすべての取り組みに授与されるべき栄誉であります。そして私的な面でこのたびの栄誉を受くるに最も相応しい妻のイルハム・ナセルは、良きパートナーとして私の仕事を常に忍耐強く支えてくれました。

「魂から行動するとき、内なる川の流れを感ずる。それは喜びである」

ジャラールッディーン・ルーミー[1]

「アッサラーム・アライクム（皆さまに平安あれ）」私は皆さまへのスピーチを、このイスラームの信徒とアラビア語を母国語とする人々の間で最も一般的な挨拶から始めたいと思います。「サラーム（平安）」は、ムスリムの祈りの中で日常的に使われている言葉です。世界の多くの文化や社会がそうであるように、イスラームの信徒にとっても、「平安」という言葉や平和を望むことは不思議なことではありません。

[1] Coleman Barks' translations, *The Essential Rumi*, *The Book of Love*, and *The Big Red Book*.

私は平和の希求と争いの仲裁を信条とする家族のもとで育てられました。私が子どもの頃に住んでいたのは、1978 年に政府の政策と国内の宗派意識の力学によって引き裂かれるまで、人々が調和し共存していた民族的にも宗教的にも多様性に満ちた地域でした。社会を分断する出来事の中で、当時 10 代だった私は、人々が違いを理解し尊重し合わなければ、互いの共通点を祝福することは不可能であることを知りました。それ以来、私はこの教訓を胸に刻み、40 年にわたり活動を続けてまいりました。

庭野平和賞がその意義と理念に掲げる宗教間の対話・協力による平和支援は、私が過去 40 年にわたり個人として、また職務を通して進めてきた取り組みの中核をなすものでもあります。これまで激しい紛争地域で活動を続けるなかで、私は戦争が罪のない一般市民の生活と環境に破壊をもたらすことを目の当たりにしてきました。信仰による平和と正義の実現は決して容易なことではなく、そのような使命を我が身に引き受ける者は多くありません。しかし、一部の政治家や宗教者の手による宗教のアイデンティティやシンボルの悪用が常態化し、戦争や他者への暴力が正当化されている世界の現実に立ち向かうためには、宗教間対話による平和と正義の支援が是非とも必要なのです。

宗派を超えた平和構築活動を通して平和と正義の物語や言説に力を付与することは、平和構築に携わる政治家、宗教指導者、関連諸機関の重要な使命であると私は信じます。宗教のアイデンティティが戦いの武器にされたために、人類は今日に至るまで歴史を通じて甚大な苦しみを経験してきました。私たちが自らの使命を引き受けることで、そうした状況に効果的に立ち向かうことができるのです。

世界各地の紛争地域に共通しているのは、民衆が暴力の連鎖に巻き込まれることで、自らも他者も長期にわたる不正義にさらされ、自由と安全を求める基本的権利を奪われている現状です。そうした中、霊性への理解や宗教間の連帯は、これまで多くの紛争調停者に対して、復讐の連鎖と他者の人間性を剥奪する行為から抜け出す道を示してきました。

私たちの先人のなかには、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ダライ・ラマ、マハトマ・ガンディー、アブドゥル・ガッファール・“バシャ”・カーンなど、それぞれの信仰に基づき非暴力による和解の哲学と手法を自ら実践した偉大なる平和の創造者たちの存在があります。こうした先人の智慧から学ぼうと、私たち人類は現在も苦闘を続けています。しかし、イスラエルとパレスチナの武力衝突やロシアによるウクライナ侵攻など、根深い歴史的背景を持つ紛争は、軍事力の増大や武装化では解決できないという基本的な教訓を、私たちは 2024 年の今日に至ってもなお学びきれていません。それどころか、人々の間にはさらなる宗教的、民族的、人種的、国家的な断絶が生まれ、誰も勝者にはなりえていないのです。

世界、国家、地域、対人関係のあらゆるレベルにおいて、真の平和に向けて私たちがとるべき道は、人間性、公平性、同情、共感、真実の証明、傾聴、相互の苦痛やニーズの理解といった基本的かつ共通の価値観に立ち返ることであります。こうした和解のための基本原則を教育、メディア、芸術、その他のあらゆる文化的・政治的諸機関に取り入れることは、さらなる構造的・

社会的暴力の防止に向けた重要な一歩となります。それは地域に、それぞれの国に、そして世界に平和の文化を築く礎となるのです。

このたびの受賞は私にとって幸せと喜びに満ちた出来事であり、庭野平和財団に評価いただいたことを大変有り難く受けとめております。しかし、近年のガザ地区およびヨルダン川西岸地区におけるイスラエル軍と入植者による大量殺戮・集団虐殺行為に対し、私は抗議の声を上げなければなりません。パレスチナの住民は移住を強制され、自由と尊厳をもって生きる人間の権利を否定されてきました。イスラエル政府は、米国、ドイツ、英国をはじめとする諸外国政府の支持を受け、ガザ地区のパレスチナ人に対する民族浄化の手段として飢餓を利用したのです。破壊の規模はこの地域の紛争においても、世界中の他の多くの紛争においても前例がありません。イスラエル軍はガザ地区の住宅、学校、大学の三分の二を破壊し、建物は使用不能になりました。一千を超えるモスクが破壊され、ガザ地区のイスラームの信徒はラマダンの期間中も礼拝の場所がなく、食べ物を得ることさえできませんでした。また、生命を奪われた三万二千人の三分の二が女性と子どもであり、負傷者は八万人を超えました。こうした状況がこの地域に住む人々に残したのは、国際法も国際条約も、さらには国連の役割や機能も、パレスチナ住民に最低限の保護を与えることすらできないのではないかという疑念でした。

私はまた、昨年の 10 月 7 日に起きたイスラエルのユダヤ人市民に対する殺害行為に反対し、失われた命に心を寄せております。パレスチナ人の囚人であろうと、イスラエル人であろうと、外国人であろうと、私はいかなる人々も人質として拘束することに反対します。

この軍事衝突からわかったことは、世界の軍需産業、特に欧米の軍需産業が及ぼす影響とその力の巨大さです。また、アラブ人やパレスチナ人への人種差別やイスラームに対する恐怖感が、欧米をはじめ世界中に深く広く浸透していることも明らかになりました。さらには、大量虐殺戦争を支持するソーシャルメディアや公共のメディアの中に、パレスチナ人やムスリムを対象にしたヘイトスピーチや、彼らの人間性を否定する報道を目にすることも多くなりました。

私たちは大量虐殺があたかもリアリティー番組のようにライブ配信されている時代、まさに暗黒の時代に生きています。そこには、ガザ地区などのパレスチナの住民にハッピーエンドなどありません。

飢餓に苦しむ子どもたちの姿や、ガザ地区の住民の頭上に飛行機からわずかな食料が投下される光景を目の当たりにすると、戦争をあたかも地震や津波の仕業にしているかのようで、人間性への信頼を失いそうになります。

この半年間、正義と非暴力抵抗運動に身を投じる多くの平和活動家と同じく苦闘するなかで、私は世界中の大勢の人々が戦争を止めたいと願いながらも、政治家を説得することも政策決定者の介入を促すこともできずにいるその痛み、無力感、絶望感を我が身に感じてきました。私はまた、ガザ地区の大量虐殺作戦に対処しようと苦慮する多くの組織や共同体に身を置いてきました。

この残酷な現実にもかかわらず、私が今も考え信じ続けていることがあります。それは自衛の名の下に行われている残虐行為やヘイトスピーチに対し、あるいは破壊・追放を求める誤ったメシア的・宗教的予言の実現を図る同様の行為に対し、私たち平和の創造者はさらに行動力を高め、これまで以上に努力を傾注して立ち向かっていかなければならないということです。

残念なことに、平和の創造者を自認するすべての人々が抑圧に対して声を上げ、立ち上っているとは言えません。彼らの中にも沈黙し、その状態で自足してしまっている人々がいます。宗教間対話も平和のための宗教協力も、その多くが今回の武力衝突を受けて沈黙しました。私や多くの仲間たちは、紛争解決者に対して沈黙や「中立性」ではなく、連帯や人間的な思いやりを期待しています。ですから彼らの沈黙は、私たちにとって耐え難いものなのです。

ルーミーはまた彼の詩の中で、私たちに暗闇から逃れ、暗闇を避け、希望を求めるよう教え導いています。

探し求めているのなら、喜びの心で我らを求めよ。

我らは喜びの王国の住人であるから。

我ら以外の何者にも心を与えず

曇りなき喜びである者たちの愛に与えよ。

絶望の近くに迷い込んではならない。

希望はここにある。希望は現実であり、希望は実在する。

暗闇の方角に向かってはならない。

まさしく、太陽は存在するのだ。

一方で今回の武力衝突は、パレスチナの正義のために世界が連帯することの意義を理解し、その一翼を担った諸宗教の多くの平和の創造者に向けて、希望と回復の精神をもたらすものでもありました。毎週、世界中で何百万人もの人々が声を上げ、路上で抗議活動をしました。勇気ある宗教指導者や信徒たちもまた、正義と即時停戦を訴えました。さらにソーシャルメディアは、数十億もの連帯のメッセージと画像を発信しました。私たちは人間を擁護する言葉や画像が、人間の創造力によって次々に生み出される様子を目撃したのです。

この創造性に満ちた抗議の波と連帯を目の当たりにして、私は人間への信頼を回復し、私たちには共通の人間性を取り戻そうと意を新たにする能力が具わっていることを再確認しました。 私たちの行動は、たとえ小さなものであっても、積み重ねることで援助や共感を必要とし

ている人々の生活に大きな力を提供できるのです。私は若いアメリカ人アーティストによる停戦を呼びかけるシンプルな絵が、パレスチナ人や彼らとの連帯を進める人々の間で回覧される様子を目にしたことがあります。

過去６か月間、宗教間の対話・協力を進める諸機関は、外圧に屈せず自らの立場を守り続けました。そのことが、パレスチナ人、すべての先住民、そして抑圧と不正義を経験するあらゆる人々の胸にあった平和への希望、そして自由と尊厳への希望を再燃させたのです。そのため私は、本日の贈呈式ではこうした諸機関への賛辞を忘れてはならないと感じました。

私はこれまで５つの原則を掲げ、宗派を超えて平和構築活動を進めてまいりました。この困難な時代において、私たちが平和へのエネルギーを維持する支えとなった５原則を、ここでご紹介させていただきます。

1. 人間の多様性の美しさを認識し、祝福する。

2. 平和構築と紛争解決のプロセスに心を導入する。

3. 疎外されている人々、声なき人々のために、いかなる場所であろうと立ち上がる。

4. 最も暗い闇に閉ざされている瞬間に、平和を想像する技術を高める。

5. 活動のなかに、霊性と信仰が心を毒から解放する魔法をかけられる空間を設ける。

最後になりましたが、庭野平和財団の支援が世界中の平和活動に向けられていること、そして私たちがどこまでも平和的な手段で自らのビジョンとニーズを達成することを求めてやまないその一貫した姿勢が、私たちの勇気と希望の源泉であることを今一度お伝えさせていただきます。このたびの私への評価とご支援に感謝申し上げます。気概を新たに、今後も宗教間・国家間の分断を超え、平和構築活動の継続と発展に尽力してまいります。

スピーチの終わりに、スーフィーの偉大なる思想家イブン・アラビーによる、宗教の多様性の美しさを讃えた詩の一節をご紹介させていただきます。

炎の中の庭！

いま私の心はあらゆる形を受け入れる。

ガゼルのための牧草地、修道士のための僧院

偶像の神殿、巡礼者のカアバ

トーラーの石板、そしてクルアーンの書。

私は愛の宗教に従う。

そのラクダが何処に向かおうとも

それが私の宗教であり、信仰である。

アッサラーム・アライクム（皆さまに平安あれ）

平和と正義のためのサラーム研究所所長

アメリカン大学・サイード・アブドゥル・アジーズ平和紛争解決学教授・学部長

モハメド・アブニマー